

経済の分野から租界にアプローチした研究を進め、租界に対する関心を広げ、深めることを追求する。

また、私たちの研究班の名前に背かぬよう、韓国における日本租界についても現地の学者に学びつつ調査、研究を開始する。すでに仁川の旧日本租界を参観し、現地の租界研究者の面識も得ているので、一步を踏み出すのみである。

中国、韓国の学者との研究交流を深めるべく、適宜ワークショップを開きたい。2009年3月に上海で開くのを皮切りに、毎年中国か韓国の現地で開き、そこでの成果を蓄積して本学で国際シンポジウムを開くことを展望する。

すでに実施しつつあることだが、中国各地で租界生活を体験した人の聞き取り調査を積み重ねて、その角度から租界の実態を明らかにすることを目ざし、また、ポスター、絵八ガキ、写真等々、租界に関連するような内容の調査、研究に取り組んでいる人たちとの研究交流に努める。そのうち、ポスターについては2008年10月25日に公開研究会を行うことにしており、その他非文字資料研究に関わるテーマは意識的に取り上げて学び、私たちの研究関心を深めるのに役立てたいと考えている。

そうして、以上のような取り組みを通じて、2009年中に租界研究の中間報告集の第3弾をまとめるつもりである。

個別共同研究

持続と変容の実態の研究 対馬60年を事例として

対馬調査の課題と展望 持続と変容の諸相を探る

橘川 俊忠（非文字資料研究センター 副センター長 / 研究班代表）

● 対馬調査の出発点

対馬は、日本列島と朝鮮半島の間位置し、大陸との交流の接点として古くから独特の文化を育んできた地域である。また、近代以降、国境にある地域として第2次大戦まで軍事的観点から要塞地域として特殊な扱いを受けてきた。戦後、九学会（最初は八学会）が連合調査を企てたとき、その第一番目の調査地に選ばれたのも、その特殊性の故であった。民俗・社会・文化・自然などあらゆる面で近代科学による調査の処女地であり、古い文化の層が手つかずのままに残っていることが予想された。

日本人類学会・日本言語学会・日本考古学会・日本宗教学会・日本民族学協会・日本民俗学会・日本社会学会・日本心理学会および日本地理学会（二年目から参加）の九つの学会による対馬総合調査は、1950年と1951年の二回にわたって行われた。その結果は、『対馬の自然と文化』（九学会連合対馬共同調査委員会編・古今書院刊）という報告書としてまとめられている。われわれが出発点とするのは、この九学会による総合調査とその結果としての報告書である。

この九学会の調査は、複数の専門を異にする学会が、一つの地域を対象にして総合的に調査した初めてのケースであるという点で画期的であったばかりではなく、そ

の後の対馬の地域研究にとっても決定的な意味を持った。その理由の一つは、この調査では、調査者がいうインテンプな方法がとられ、一つの地域に集中的かつ総合的な調査が行われ、その記録が報告書に記載されているということである。その場合、地域というのは、日本全体、あるいは東アジアの中での対馬という地域と、対馬の内部の「集落」単位の地域という二重のレベルで設定されていた。そして、対馬内部の地域性を考慮して、集落は北部・中部・南部から三つの集落が特に選ばれ、その三つの集落についてはかなり詳細な記録が残された。今から約60年前の記録を、研究としてどう生かせるのかを検討しようというのが、本研究プロジェクトの課題であり、出発点である。

● 持続と変容

一般に社会は、よほど孤立していない限りは、時間の経過とともに変化していく。しかし、その変化の跡を一つの集落に視点を据えて詳細に跡付ける研究は案外少ない。時間の経過にしたがってその変化の跡を記述するというのは、歴史学という学問であるが、歴史の記述は多くの場合、より大きな単位でなされる。人類、国家、県、市町村などの単位である。そして、研究者の関心は、よ

り多く変化のほうに向けられ、持続するものへの関心は小さいか、あまり大きくはない。

しかし、現実の社会や文化は、変化するものと持続するものが混在し、相互に影響しあいながら形成されている。また、変化するものと持続するものとの相互作用は、大きな政治・制度の変更の場面よりも、人々の生活の具体的なあり方を取り上げたほうが、より深く観察、考察できる。革命と呼ばれるほどの大きな変動があったとしても、人々の日常生活は途切れることなく連綿として続けられていく。また、人々の日常生活における小さな変化の積み重ねが、時に巨大な革命的変動を引き起こし、その革命的変動の影響は、確実に人々の生活の中に浸透してくる。そして、その相互作用の過程は、あらゆる地域で一樣に現れるわけでもない。そういう社会や文化の在り様は、ミクロな地域・現象を仔細に観察し、分析することによってしか明らかにすることはできない。

社会や文化を持続と変容の視点から動的に把握することを目指す研究にとって、ミクロな地域についての一定時点での詳細な記述が残されているということは、研究の基礎として極めて貴重な意味を持つ。特に、それが意識的に詳細な記述として残されている場合には、その記録が作成された時点以後の変化したものと変化しないものとをとらえるための基準が一定程度明確になっているといつてよいであろう。

もちろん、基準といつてもそれをすべて正しいとか、正確であるとか、全体が描かれているというわけではない。調査当時の様々な条件によって不十分な点が多々あることはいうまでもない。したがって、持続と変容の諸相を検討するに当たって、当時の研究・調査の結果を再検討しながら、その欠を補うということも課題となる。

● 調査の方法とねらい

九学会連合による調査の内容は、概ね社会構造（階層、親族組織、人口構成、職業等を含む）身体形質、言語、民俗（信仰、儀礼など）などであり、文書資料および聞き取り資料によっている。非文字資料への注目度はあまり高くない。しかし、調査の中で映画・写真などによる記録も残している（残念ながら撮影された映画フィルムの所在は、今のところ不明である）また、各集落の住宅配置図も作成されている。非文字資料研究の観点から、調査は、これらの画像資料の検討を第一の課題とする。

実際、景観は変化を可視的にとらえることができる最大の資料である。予備調査で対馬を巡検した経験からも、



現在の鰯浦漁港（2008年8月30日撮影）
コンクリートの護岸ができ、船はプラスチックに変わっている。

集落の海に面した入り江という入り江には、コンクリートの護岸が築かれ、立派な漁港の施設が整えられており、海岸の景観は一変している。また、道路やトンネル・橋梁も、60年前に比べればはるかに整備されている。山は、緑多く、起伏の在り様はあまり変わっていないように見受けられるが、3、40年生と思われる杉・檜の植林帯が広がっており、植生の点では大きく変わっているように見える。それに対して、集落内の住宅の戸数や配置にはそれほど大きな変化は見られない。調査では、そうした変化を写真・地図などの画像資料と実地の見分によって確認するところからスタートする。

そして、次にそうした変化のあり方は、どのような要因によって起こってきたのか、また、海岸や山の変化は集落に暮らす人々に何をもたらしたのか、を考察する。そのためには、各種の統計資料、聞き取り資料などを総合することが必要になる。その上で九学会の調査記録との比較を行い、何がどのように変化し、何が変わらずに残っているのかを具体的に検証していく。

ところで、九学会の調査から今日までの約60年間は、いわゆる高度成長期を含み、日本全体が激しく変化した時期である。とくに地方では、人口の流出の結果、過疎化が進み、衰退・空洞化が指摘され、今に至るまで大きな問題となっていることは周知の通りである。そうした変化は、地方にとって国全体あるいは国の中央部分から押し付けられた外部からの要因によって説明されることが多いが、地方自身にそれを許容し、かえって促進するような要因は無かったか、そういう問題意識を持ちつつ、この時代の変遷の過程を検証していくつもりである。